

# 千葉市双子塚

— 横戸団地建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1983

千葉県住宅供給公社

財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉市<sup>ふた</sup>双子<sup>ご</sup>塚<sup>づか</sup>

— 横戸団地建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1 9 8 3

千葉県住宅供給公社

財団法人 千葉県文化財センター

# 序 文

千葉市の北部地域を流れる花見川は、小支谷を形成して東京湾に注いでいます。その流域は、自然環境にめぐまれ、また台地上には原始・古代の遺跡が数多く所在しています。

千葉県北部のほぼ中央部に位置するこの地域は、大規模な住宅団地が多く建設されています。

千葉県住宅供給公社が、この地域に横戸団地の建設を計画するのに伴って、千葉県教育委員会では、用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県住宅供給公社をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、予定地内に所在する本遺跡については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになりました。記録保存に当たっては、財団法人千葉県文化財センターが調査機関の指名を受け、昭和57年7月1日から8月6日まで調査を実施しました。

本遺跡は、調査の結果、古墳時代に構築された円墳が近世に至って塚として利用されていたことがわかりました。

このたび、「双子塚」の発掘成果を報告書として刊行するに当たり、本書が学術資料としてはもとより、文化財保護思想の普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終りに当たり、発掘調査から報告書刊行まで種々ご指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県住宅供給公社、地元関係機関各位のご協力にお礼申し上げます。調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和58年2月

財団法人 千葉県文化財センター  
理事長 今井 正

# 例 言

1. 本書は、千葉県住宅供給公社による横戸団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、千葉市横戸町1346-1に所在する。遺跡コードは 021-038 である。
3. 発掘調査は、千葉県住宅供給公社の依頼をうけ、千葉県教育委員会の要請、指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。調査は昭和57年7月1日から昭和57年8月6日に実施し、その後整理作業を9月30日まで行った。
4. 調査は次の組織により実施した。

調 査 部 長	白 石 竹 雄
部 長 補 佐	天 野 努
班 長	阪 田 正 一
主任調査研究員	大 原 正 義
5. 整理作業及び本書の執筆は、大原が行った。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・千葉県住宅供給公社の関係者各位をはじめとし、多くの方々から御指導、御助言をいただいた。深く謝意を表する次第です。



# 目 次

序 文

例 言

I	発掘調査に至る経緯	1
II	双子塚の位置と歴史的環境	1
III	調査の方法と経過	4
IV	墳丘と周溝	5
V	出土遺物	9
VI	結 び	12

## 挿 図 目 次

第 1 図	双子塚の位置と周辺の古墳・塚・石仏分布図 (1/25,000) .....	2
第 2 図	双子塚周辺の地形図 (1/5,000).....	3
第 3 図	双子塚墳丘実測図 (1/200).....	6
第 4 図	墳丘土層断面図 (1/160).....	7
第 5 図	周溝実測図および周溝内遺物出土状況図 (1/200).....	8
第 6 図	出土遺物 (1) (1/4) .....	10
第 7 図	出土遺物 (2) (1/1) .....	11

## 図 版 目 次

図版 1	双子塚と周辺の航空写真 (千葉日報社・提供)
図版 2	A 調査前全景 (北上方より)
	B 調査前全景 (北側方より)
	C 調査前全景 (東側方より)
図版 3	A 墳丘南北断面 (北半部)
	B 墳丘南北断面 (南半部)
	C 墳丘東西断面 (西半部)
	D 墳丘東西断面 (東半部)
図版 4	A 周溝土層断面 (南北断面北部分)
	B 周溝土層断面 (東西断面東部分)
	C 片口鉄鍋出土状態
図版 5	A 墳丘部除去周溝完掘後の全景 (北方より)
	B 墳丘部除去周溝完掘後の全景 (南東より)
図版 6	出土遺物

# I 発掘調査に至る経緯

双子塚は、千葉県住宅供給公社によって計画された横戸団地の建設に伴って、記録保存することになった遺跡である。

千葉県教育委員会（文化課）では、昭和55年7月に千葉県住宅供給公社より、「埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて」の照会があったため、昭和55年11月に現地踏査を実施した。その結果、計画用地内に本双子塚の所在を確認し、その旨を千葉県住宅供給公社へ回答した。これに基づき協議の結果、その取り扱いについては、記録保存とすることとなり、調査者として千葉県文化財センターが指定された。昭和57年度の千葉県文化財センターの事業として、千葉県住宅供給公社との間で委託契約が締結され、昭和57年7月1日から7月31日までの発掘作業、8月1日から9月30日までの整理作業の計画で調査の実施をみるに至った。

# II 双子塚の位置と歴史的環境

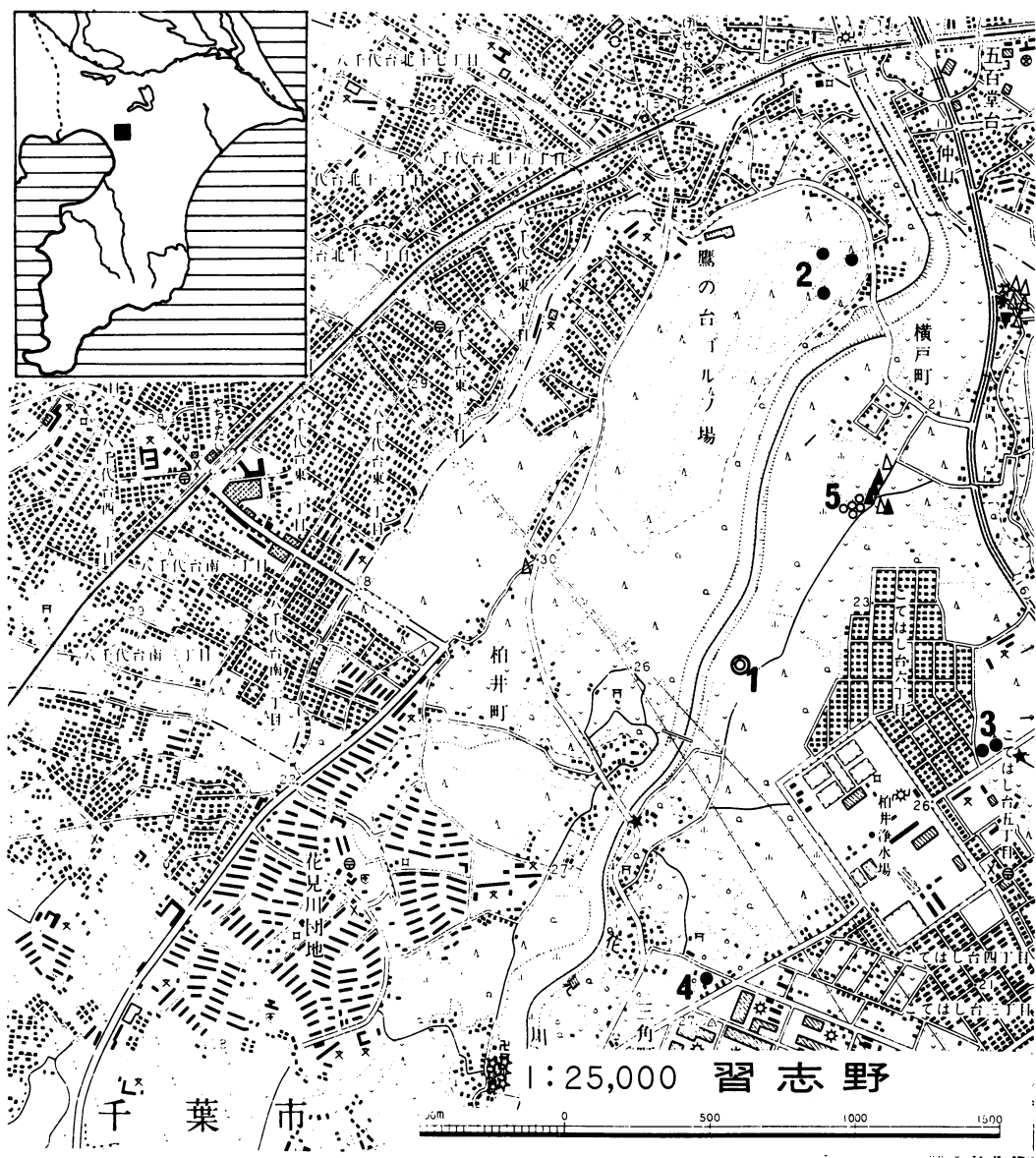
本遺跡は、千葉市横戸町1346-1の地籍に所在し、千葉市の西北端に位置する。本遺跡調査の契機である横戸団地の建設は、首都圏のベッドタウンとして市街地化の進んだ当地域にあって、八千代台の市街地・花見川団地・こてはし台団地・勝田台団地および千葉鉄工団地に囲まれて島状に残った畑地および山林のうち、花見川とこてはし台団地の間の約20万㎡の用地を対象として計画されたものである。

双子塚は、この用地の最南端に位置する。塚の立地する台地は、標高約28mを計る最上位面で南北約500m・東西約350mの広がりを持ち、西は花見川によって画され、南は約10mの標高差を持つ花見川の支谷によって画される。東側は、柏井浄水場およびこてはし台団地に接し、北側は、標高差約5mを測る下位の台地面に接する。塚は、この上位面の北端に近く、非常にゆるやかに北に向かった傾斜が始まる直前の地点に位置する。

遺跡の立地する台地は、下総台地における印旛沼側と東京湾側の分水界にあたり、西側約100mを南流する花見川は、分水界をこえての先行性流路を利用して掘られた印旛沼からの洪水時の排水路であり、両岸との比高約25mを測る掘割となっている。

周辺の遺跡分布は、当地域が分水界にあたることもあってか、花見川の中下流域や、印旛沼側の沖積地に面した地域に比して密度が希薄である。

周辺に分布する古墳（註1）としては、北約1.3kmに位置する鷹の台古墳群、西約800mに位置する南愚味向古墳群、北約1kmに位置する後口古墳がある。鷹の台古墳群のうち1基は前

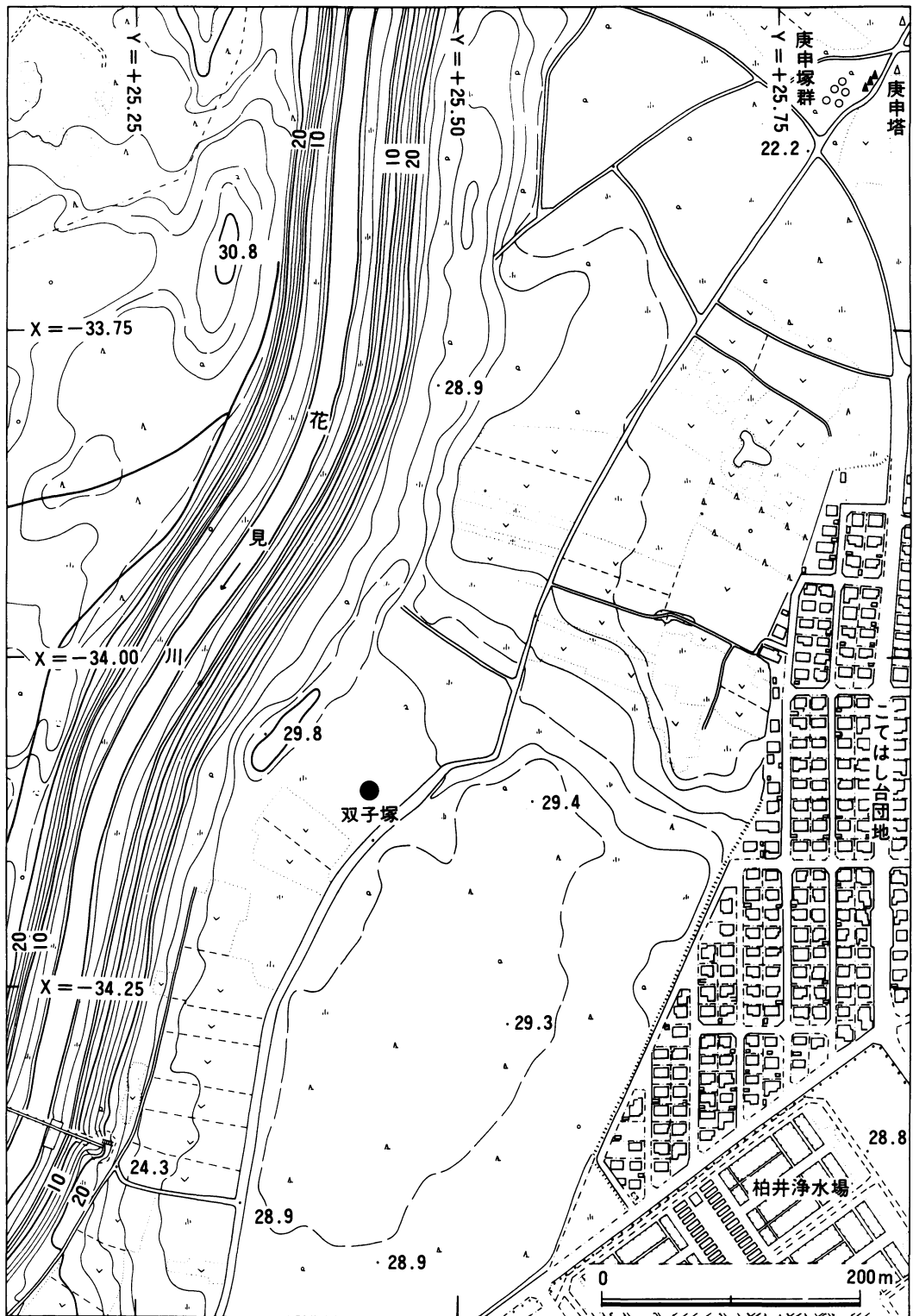


第1図 双子塚の位置と周辺の古墳・塚・石仏分布図

—この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図（習志野）を使用したものである。—

- 1. 双子塚      2. 鷹の台古墳群      3. 南愚味向古墳群      4. 後口古墳
- 5. 庚申塚群

△ 道しるべ      ▲ 庚申塚      ★ 道祖神      ▼ 仏像供養塔      ☆ 月待塔



第2図 双子塚周辺の地形図 (1/5,000、座標系：第IX系、昭和54年測量  
千葉市作成の「千葉市基本図 IX-L E 16-1」を使用したものである)

方後円墳であり、組合式箱型石棺が確認されている。南愚味向古墳群は、現存するのは円墳2基のみながら、柏井浄水場にかけて数基あったものらしく、本遺跡に最も近い古墳群といえよう。後口古墳は、現在単独で確認できるものである。

本遺跡は調査の結果、古墳の墳丘が塚として利用されたものと推測されるに至ったが、本遺跡の所在する横戸・柏井地区は、都市化の著しい千葉市にあって、比較的近世の石造物(註2)の多い地区である。また、調査地の約600m北方には、5基からなる庚申塚群も所在する。径5~7m、高さ1m前後の小規模な塚であるが、隣接して6基の庚申塔があり、そのうち2基は道標を兼ねている。

### Ⅲ 調査の方法と経過

調査は、古墳の可能性を含みながらも塚として設定されており、調査の方法もこれに習ったものとなった。全体測量の後、東西南北に幅1.5mのトレンチを設定し調査した後、この結果に基づいて全体の調査を計画することとした。

調査は、昭和57年7月1日に開始し、8月6日に終了した。

7月1日~3日 準備・測量。器材の搬入等諸準備の後、草刈・写真撮影・10cmコンタによる全体測量を実施する。

7月5日~14日 トレンチ調査。墳頂に中心杭を設定し、東西南北に幅1.5m、長さ13.5mのトレンチを設定し、発掘を開始する。各トレンチとも表土を剥いだ段階で、外周を廻る溝の存在が確認されたが、幅は一定でなく、特に北側の溝は外側の立ち上がりが見えにくい。次に、各トレンチを盛土部は旧地表面まで、溝部は溝低まで掘り下げる。旧地表にロームおよび黒色土を積み重ねたものであることが明らかになり、古墳の可能性が高まる。また、北側は耕作により裾部の一部を削られていることが判明する。

7月16日~20日 盛土部については、土層観察用壁を残し、全面表土層を削除し主体部等の遺構の検出をはかる。トレンチを盛土部についてはローム層まで掘り下げ、土層断面の実測を実施する。

7月21日~27日 周溝の調査。周溝が幅・深さとも一定しない不定形なものであることが明らかになるとともに、周溝内より遺物が検出された。北西側から土師器の甕底部と小形甕 $\frac{1}{3}$ 個体。西側から片口鉄鍋。南西側から有田焼の皿。南東側から寛永通宝2枚。

7月28日~30日 盛土の削除。盛土を層別に削除したが、主体部等の遺構は検出されなかった。北西部の盛土中に縄文土器片が比較的まとまって検出された。土層断面写真撮影。

8月2日～4日 土層断面観察用壁の除去と周溝の実測および写真撮影。

8月5日～6日 全面をローム層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出をはかった。器材等の撤去を行ない調査を終了した。

## IV 墳丘と周溝

遺跡の調査時における状況は、疎らな樹木と篠竹や草に覆われた荒地で、墳形や規模も判然としないものであった。草刈清掃により直径約15m、見かけの高さ約2mの規模のものであることが明らかになった。

墳丘の形態は、北側裾部が急傾斜になり直線的になることを除けば、ほぼ円形といえる。この北側の直線的な部分は、墳丘の北側まで畑地として利用されていた時期に削り取られたものであることがうかがえた。また、墳頂には平坦面が認められない。墳丘の外側には10～20cm低い部分が円弧を描いて廻り、周溝の存在が予測された。この低い部分は北西方向に流れるように伸びるが、これは遺跡が北に向ってゆるやかに傾斜が始まる高位台地面の端に位置することによると思われる。また遺跡の南側と西側には巾2mほどの現在全く使用されていない道があり、やや低くなっている。

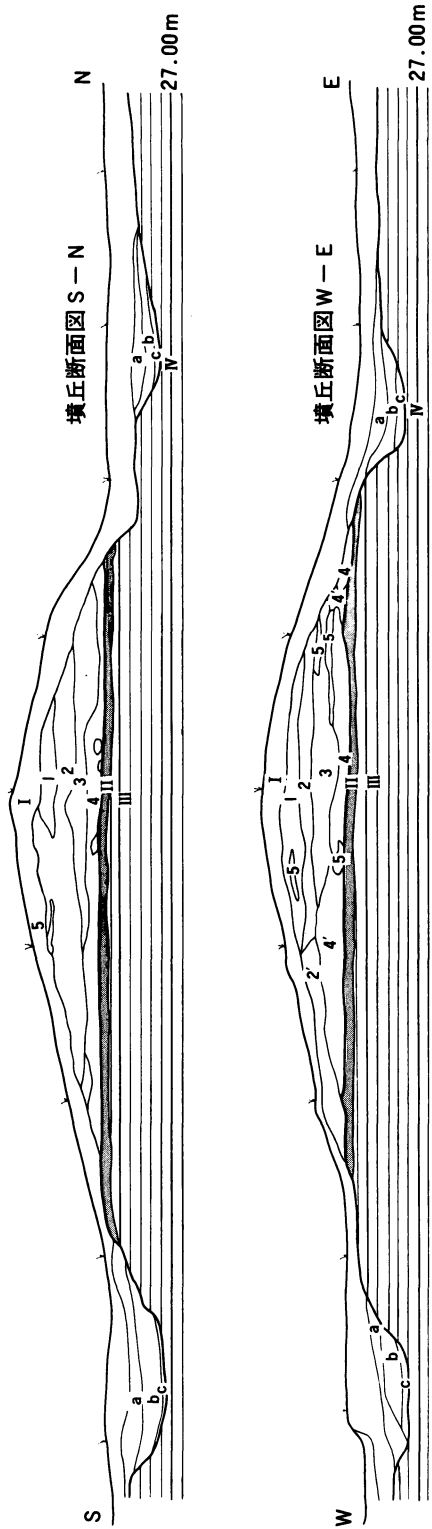
墳丘は、標高28.4m程のほぼ平坦な旧地表面に積まれている。平坦面は、墳丘北裾部が削り取られているために周溝の立ち上がりからの推測によるが、南北16.5m、東西15.6mのほぼ円形になる。墳丘部の西側部分には、2m程の幅で旧表土の認められない平坦面があり、南側部分には、周溝の内側上端から積土の確認できるところまで2m程の間隔がある。北側は耕作による削除により確認できず東裾部は、墳丘から周溝に直接移行するものの少なくとも西から東にかけて幅2m程のテラスを認めることができる。もとより墳丘部においては、表土層も本来積土であったであろうし、流失も考えられるが、遺存した墳丘の墳頂が、周溝の内側上端から推測される中心より東へ1.8m北へ0.8m程偏していることなど合せると、このテラスは本来的に存在していたものと考えられる。

墳丘の構築は、まず4層および4'層を旧地表に積んでいる。この層は軟質のロームブロックを多く含む。このロームブロックは特に旧地表面に接して集中し、やや固められた感じを呈する。周辺の土を掘り下げて順次積んだとするには3層と逆転している感じがあり、土が選ばれているようである。次に最も旧表土に近い3層が積まれているが、この分布は北東に遍する。2層および2'層は全体を覆うように広がり、層厚もあり積土の主体となっている。1層はハードロームブロックを含む土層で、周溝のハードロームに及ぶ部分の土が積まれたものと思われる。



第3図 双子塚墳丘実測図 (S-N、W-Eは土層図の原点) (1/200)





**基本層**

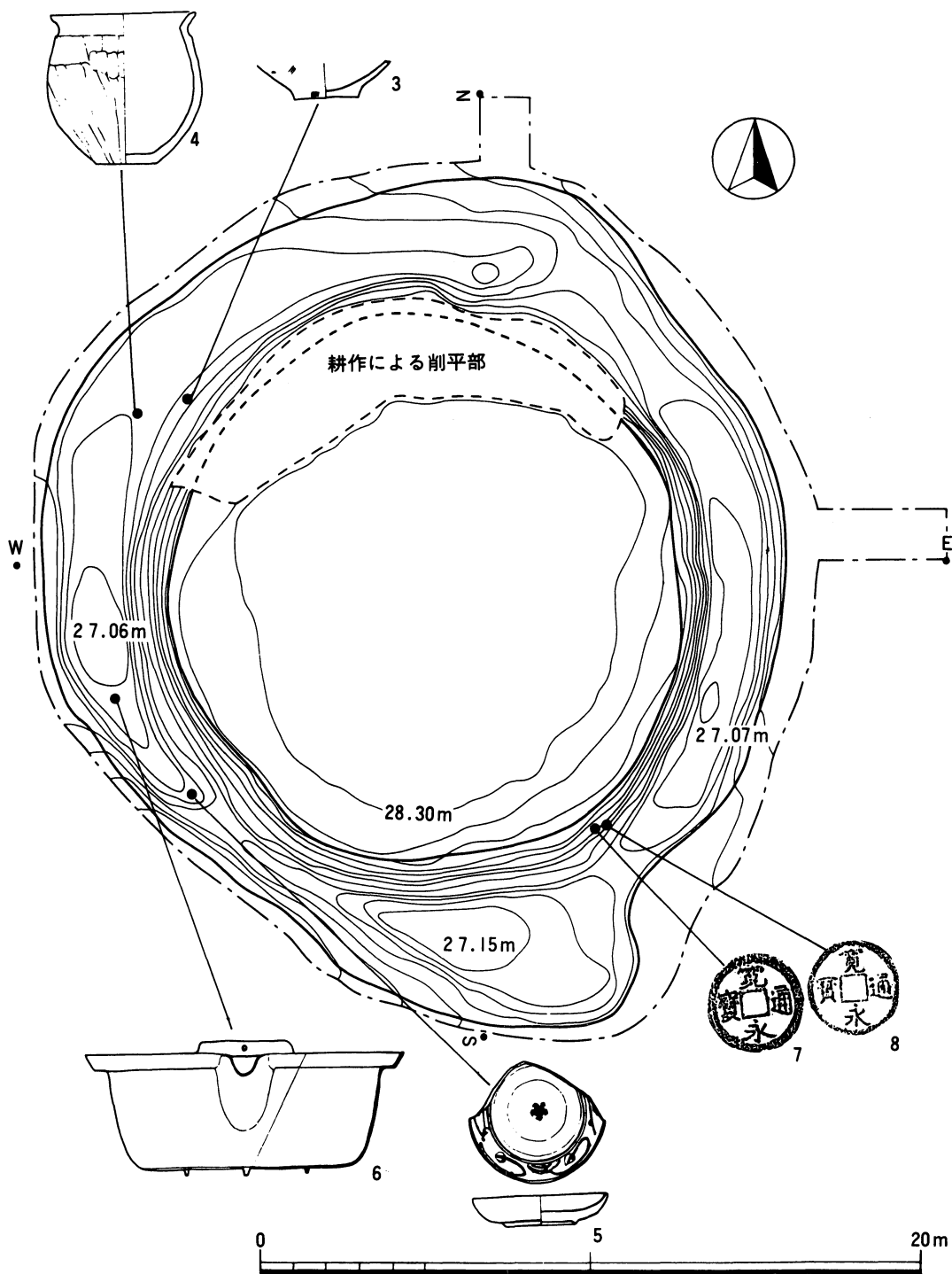
- I 層 表土層 黒褐色から暗赤褐色を呈し、篠竹および草の根が密生する。填丘部の本層は本来的には積土であり、また填丘外では層厚が耕作の及んでいた深さにあたろうが、草根等の影響により分層は不能。填丘頂部ではややや、黒色味が強い。層厚30~40cm。
- II 層 旧表土層 黒色を呈し、填丘下にのみ認められる土層で、特にその上半が著しく黒い。層厚約20cm。
- III 層 明赤褐色軟質ローム層 いわゆるソフトローム層で、上半部にやや明るい斑状のしみを認める。層厚50~60cm。
- IV 層 明褐色硬質ローム層 周溝の溝底部の一部が達するだけである。

**積土層**

- いずれもローム土と黒色土の混合土を主体とするが、その割合とロームブロック・黒色硬質土ブロックが含まれる量によって分層した。
- 1 層 径5cm程のロームブロックを1割程度含むローム土の割合が多く積土中最も明るく赤褐色を呈する。
- 2 層 径3~5cm程の黒色硬質土ブロックと径5~10cm程のソフトロームのブロックを各5%程度含む。1層より暗く3層より明るい。暗赤褐色。
- 2層 2層に基本的に類似するが黒色硬質土ブロックを含まない。
- 3 層 径3~5cmの黒色硬質土ブロックを1割程度、ソフトロームブロックを5%程度含む。積土中最も暗く黒褐色。

- 4 層 ソフトロームブロックを15%程度含む、黒色硬質土ブロックを少量含む。ロームブロックはII層との境界(旧地表面)に集中し、やや固められ剥けるようになる。
- 4層 4層に類似するが黒色硬質土ブロックを含まない。
- 5 層 黒色土で、ローム土などを含まず、部分的に認められる。
- 周溝内覆土
  - a 層 著しく黒色味の強い黒色土。やや粘性を帯びる。
  - b 層 わずかにローム粒を含み黒褐色を呈する。a層と同様やや粘性を帯びる。
  - c 層 ローム粒を主体とし、ロームブロックも含む。明褐色を呈する。

第4図 填丘土層断面図 (1/160)



第5図 周溝実測図および周溝内遺物出土状況図 (1/200)

る。墳頂から北東に偏在する。

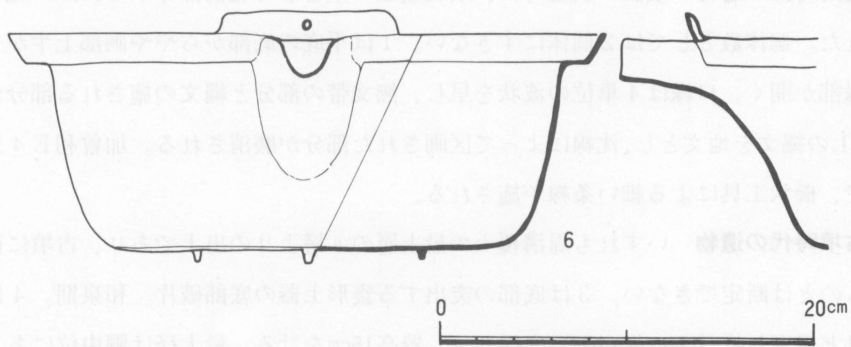
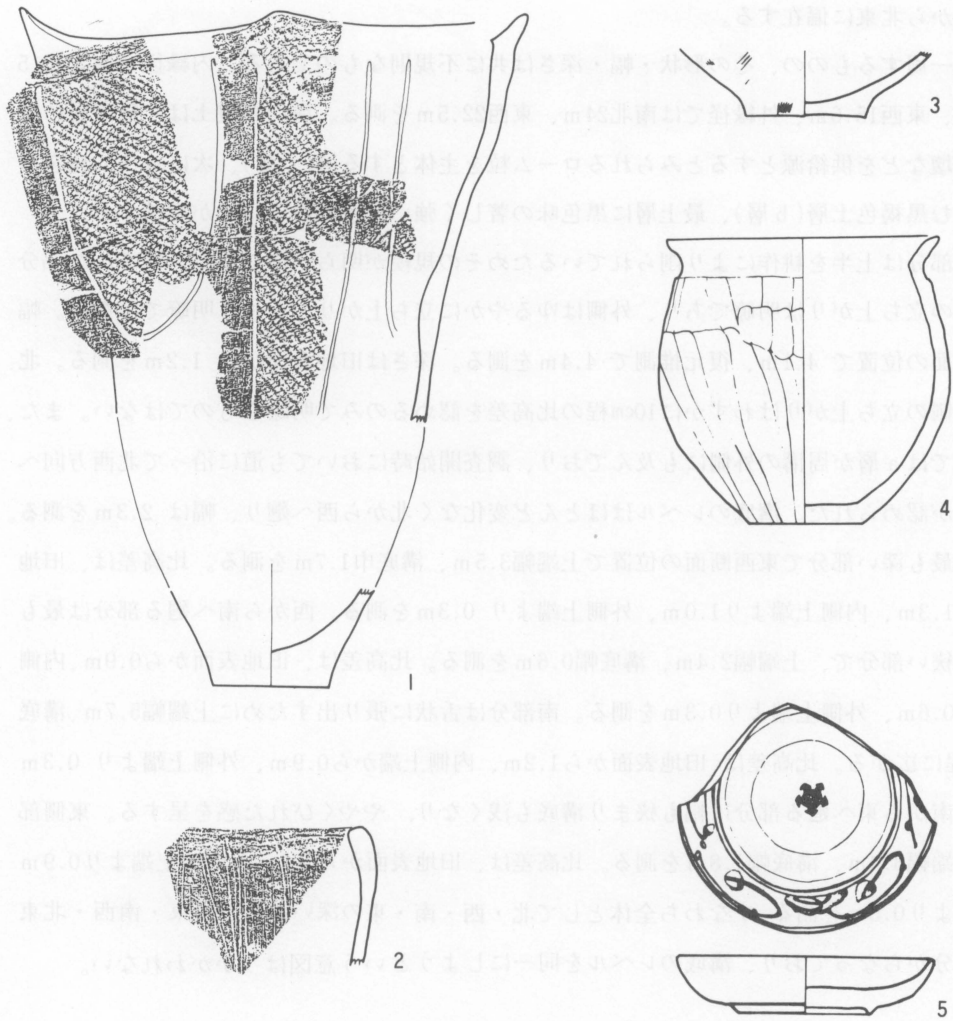
周溝は一周するものの、その形状・幅・深さは共に不規則なものである。内縁径で南北16.5m(推定)、東西15.6m、外縁径では南北24m、東西22.5mを測る。溝内の覆土は、最下層に周溝壁の崩壊などを供給源とするとみられるローム粒を主体とする層(c層)、次にローム粒をわずかに含む黒褐色土層(b層)、最上層に黒色味の著しく強い黒色土層(a層)が堆積する。

周溝北部分は上半を耕作により削られているためその規模が明らかでないが、残された部分では内側の立ち上がりは明瞭であり、外側はゆるやかに立ち上がり、あまり明瞭ではない。幅は南北断面の位置で4.1m、復元推測で4.4mを測る。深さは旧地表面から1.2mを測る。北西部の外側の立ち上がりはわずかに10cm程の比高差を認めるのみで明瞭なものではない。また、この部分ではa層が周溝の外側にも及んでおり、調査開始時においても道に沿って北西方向へ低い部分が認められた。溝底のレベルはほとんど変化なく北から西へ廻り、幅は2.3mを測る。西部分は最も深い部分で東西断面の位置で上端幅3.5m、溝底巾1.7mを測る。比高差は、旧地表面から1.3m、内側上端より1.0m、外側上端より0.3mを測る。西から南へ廻る部分は最も浅く幅も狭い部分で、上端幅2.4m、溝底幅0.6mを測る。比高差は、旧地表面から0.9m、内側上端より0.6m、外側上端より0.3mを測る。南部分は舌状に張り出すために上端幅5.7m、溝底幅3.6m程に広がる。比高差は、旧地表面から1.2m、内側上端から0.9m、外側上端より0.3mを測る。南から東へ廻る部分は幅も狭まり溝底も浅くなり、ややくびれた感を呈する。東側部分は、上端幅3.4m、溝底幅1.8mを測る。比高差は、旧地表面から1.2m、内縁上端より0.9m、外縁上端より0.5mを測る。すなわち全体として北・西・南・東の深い部分と南東・南西・北東の浅い部分からなっており、溝底のレベルを同一にしようという意図はうかがわれない。

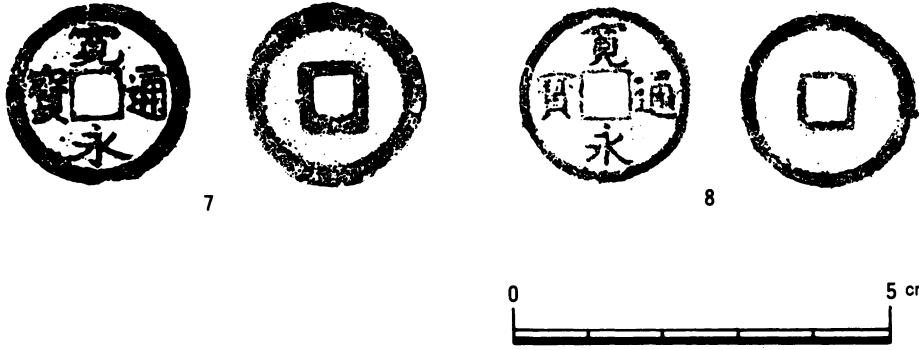
## V 出土遺物(第6・7図)

**縄文時代の遺物** 墳丘の調査時に、墳丘盛土の主として北西部分から53点の縄文土器片が得られた。個体数としては2個体にすぎない。1は平底の底部からやや胴部上半がやや収縮し、口縁部が開く。口縁は4単位の波状を呈し、無文帯の部分と縄文の施される部分がある。胴部はRLの縄文を地文とし、沈線によって区画された部分が磨消される。加曾利E4式。2は口縁部で、楯状工具による細い条線が施される。

**古墳時代の遺物** いずれも周溝覆土の最上層のa層よりの出土であり、古墳に直接的に関わるものとは断定できない。3は底部の突出する甕形土器の底部破片。和泉期。4は小形甕で、 $\frac{1}{3}$ ほど遺存し推計で口径14cm、底径6cm、器高15cmを計る。最大径は胴中位にあり15.6cmを計



第6図 出土遺物 (1) (1/4)



第7図 出土遺物 (2) (1/1)

る。口線部横ナデ、胴部ヘラナズリ。鬼高期。

**近世の遺物** 塚に関係すると推測される遺物であり、5の皿と6の片口鉄鍋は周溝南西部の覆土最上層のa層から、7：8の寛永通宝は南東部の裾部から検出された。

5の皿は径13.5cm、器高3cmの高台付の有田焼の皿である。文様はくすんだ藍色を呈し、蛇の目型に釉をふき取って重ね焼きしたあとが見られる。江戸時代後期。

6の片口鉄鍋は、周溝南西部のa層中に伏せた状態で検出された。掘り込み等の遺構は特別認められなかった。口径32cm、器高21cm、器厚2.5mmを計り、片口を持つ独特な形態の鉄鍋で、いわゆる爛鍋と称せられる形式の鍋である。

7と8の寛永通宝は、古寛永であり、7は径1.9、8は径1.8cmを計る。

## VI 結 び

本遺跡は、古墳としての可能性を認めながらも、塚として調査を開始した。塚として扱われた理由は、近接して古墳が認められず、北東約 600m に明らかに塚と認められる庚申塚群が存在することによった。一方、古墳としての可能性は、その規模が庚申塚群のそれと比して大きいこと、周囲に周溝を思わせる窪みが存在することと、その「双子塚」と称せられる名称にあった。

調査の結果、周溝の存在、規模、積土の状態などからして古墳として築造され、江戸時代に塚として利用されたものと推測されるに至った。古墳としては、主体部も検出されず、遺物としても古墳に直接的に関係すると判断できる遺物はなく、その時期的な判定は困難である。

塚としては、寛永通宝・片口鉄鍋・皿などからして江戸時代に利用されたものと推測される。元地主をはじめとする横戸および柏井地区の聞き込みを実施したところ、北東約 600m に位置する庚申塚群および庚申塔については、庚申祭や「横戸村に婿入りした人が、力量を示すために朝食前に築いてみせた塚だ。」という伝承など具体的であり多くの人が知っているのに対し本双子塚については存在を知らない人も多く、わずかに旧横戸村と旧柏井村の村界にあたることと、「境神」ということを聞いた人がいたのみであった。北東 600m の庚申塔の中に「西かしわいみち」と刻まれた文化七年の銘文を持つものがあり、本遺跡の西から南を廻る現在使用されていない道が、旧横戸村から旧柏井村に至る道であったことが推測される。道沿いであり、しかも旧横戸、旧柏井両村の村界が台地の平坦面という変化のないところに設定されていて、そこに本遺跡が存在することは単なる偶然ではないものと思われ、わずかに「境神」という言葉が記憶されていることからしても「境塚」（註3）としての役割を果していたものと考えられる。

註

- (1) 千葉市史編纂委員会 1976 「千葉市史史料編1」
- (2) 千葉市教育委員会 1981 「路傍の石仏」 千葉市文化財調査報告書 第5集
- (3) 柳田國男 1913 「境に塚を築く風習について」 郷土研究一卷三号

# Summary

## FUTAGOZUKA

### The beginning

The Housing Service Corporation of Chiba Prefecture planned the construction of Yokoto housing development at Yokoto-cho, Chiba as a part of the project of Real Estate Development in Capital Region.

Futagozuka, located in the planning site, was researched by the Cultural Properties Center in Chiba Prefecture, during the period from July 1 to September 30 in 1982. This is the research report about it.

### Situation

The remains stand in Yokoto-cho, Chiba city (lat. 35°41'20" N. and long 140°7'20" E) and are called Futagozuka. They are located in the plateau of Shimofusa which stands in the southeast of the plains of Kanto and lie in the divide between the Tone River basin and the basin on the side of Tokyo Bay, and are 28 meters above sea level.

### The research result

As the research result, it becomes clear that the remains were built as an old mound in the period of ancient burial mounds and were the object of belief as mound and were partly repaired at the latter of Edo period.

### The old mound and the circular drain

It has a diameter of 23-24 meters and a height of 170 centimeters. It is a round form and is partly broken for farming. The circular drain around the old mound, 80-200 centimeters in width and 50-120 centimeters in depth, isn't completely arranged. The main part of the old mound wasn't detected.

### Unearthed articles

Two jar-shaped potterys were excavated in the circular drain of the Izumi and Onitaka term of the period of ancient burial mounds. It is unknown that those were made with the construction of the old mound. On the surface of the circular drain, a lipped-iron pot, a dish and two pieces of coins of Kaneitsuhō were excavated. Perhaps these are articles of the latter of Edo period when the remains were the object of belief as mound, considering that the remains stand on the boundary between the former villages of Yokoto and Kashiwai.



双子塚と周辺の航空写真（千葉日報社 昭和57年1月撮影） 1/6,500



図版 2



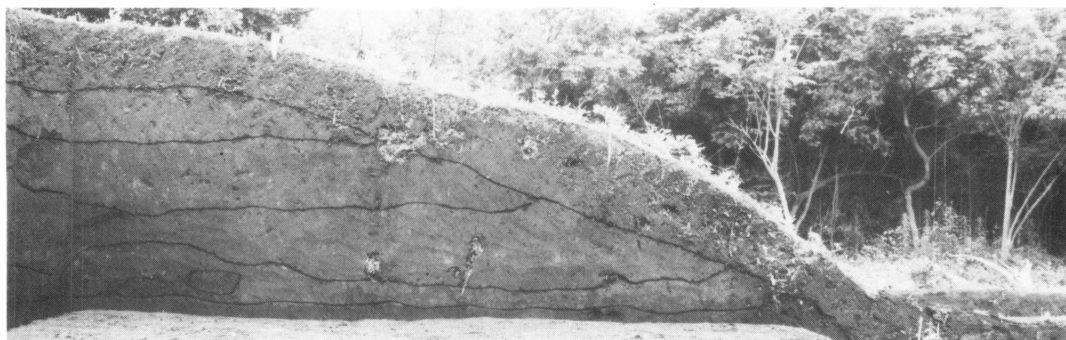
A 調査前全景（北上方より）



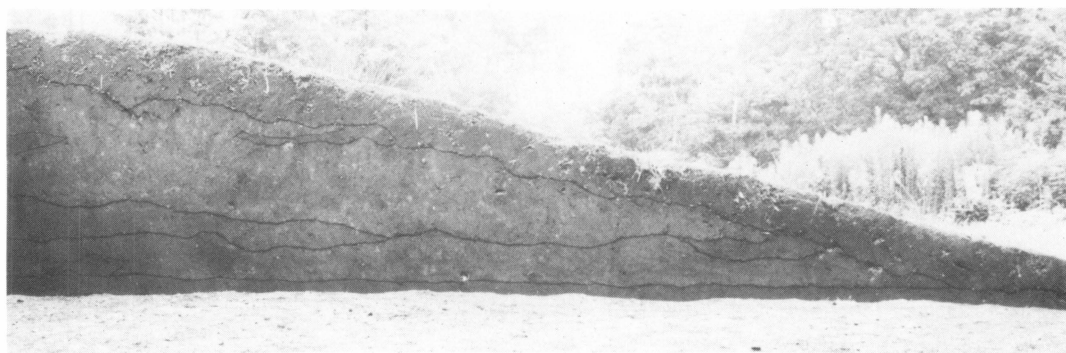
B 調査前全景（北側方より）



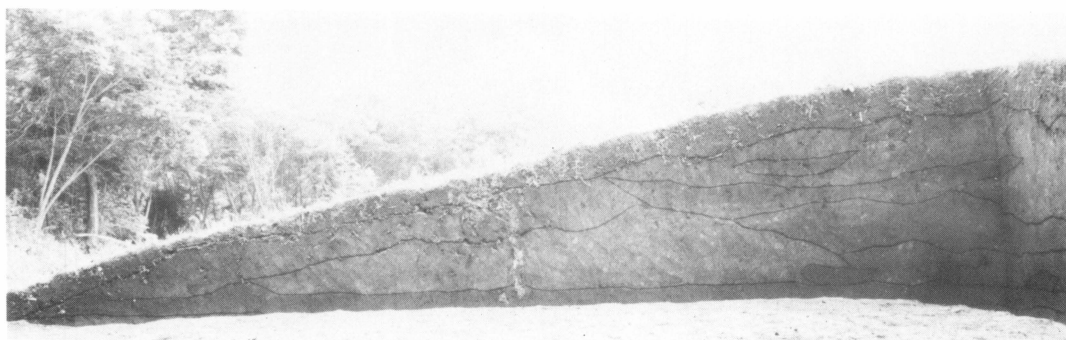
C 調査前全景（東側方より）



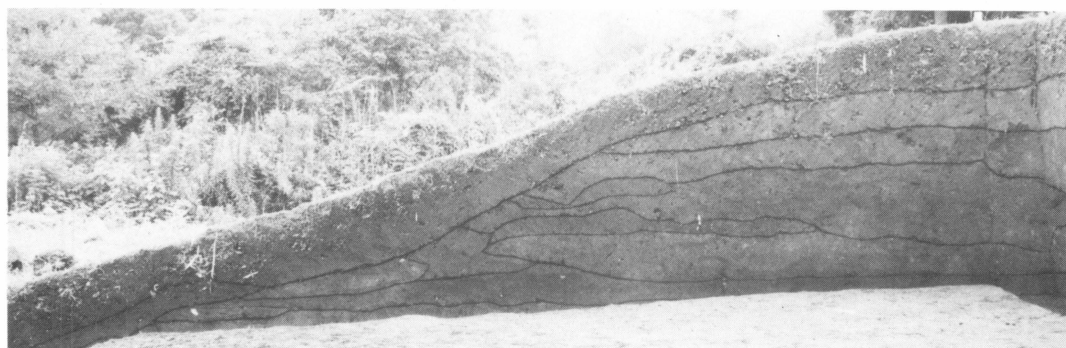
A 墳丘南北断面（北半部）



B 墳丘南北断面（南半部）

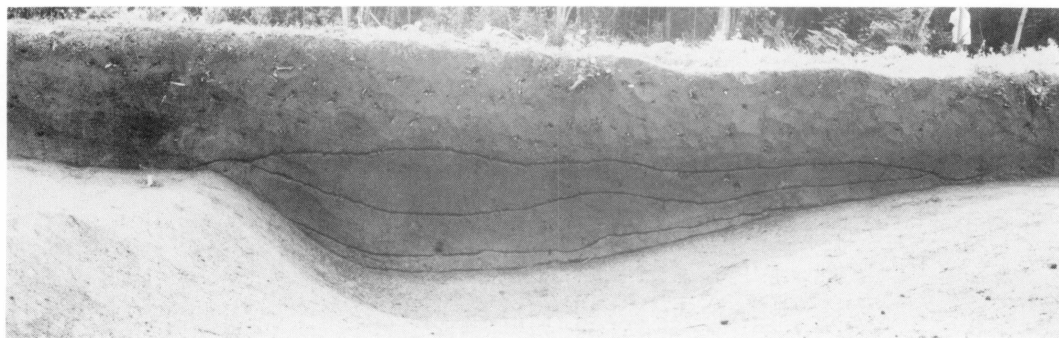


C 墳丘東西断面（西半部）

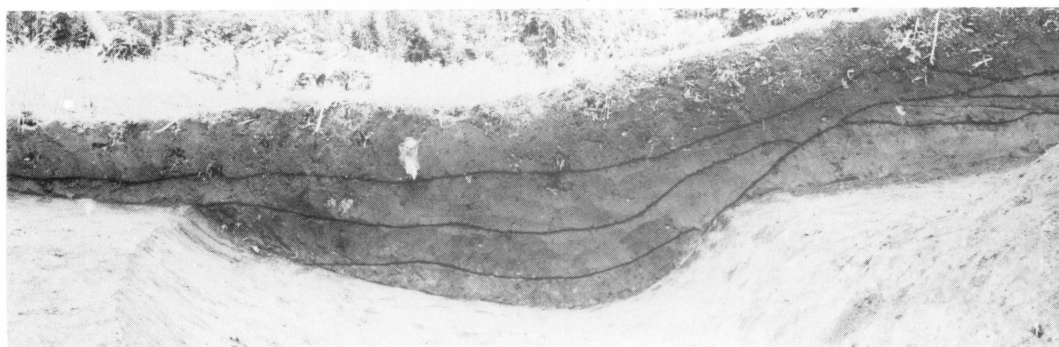


D 墳丘東西断面（東半部）

図版 4



A 周溝土層断面（南北断面北部分）



B 周溝土層断面（東西断面東部分）



C 片口鉄鍋出土状態



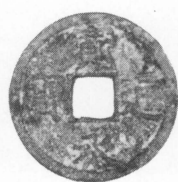
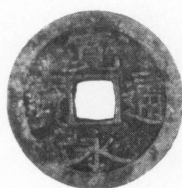
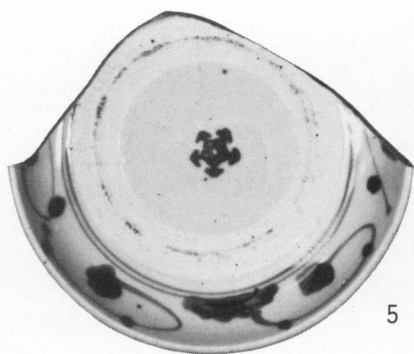
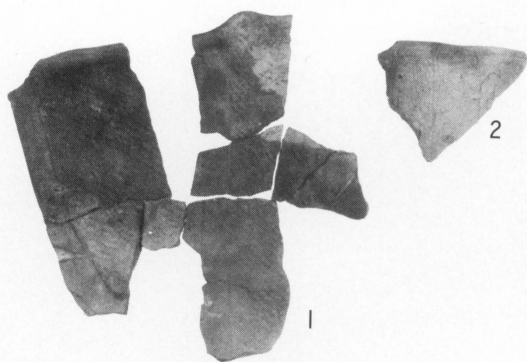


A 墳丘部除去周溝完掘後の全景(北方より)



B 墳丘部除去周溝完掘後の全景(南東より)

图版 6



千葉市双子塚

—横戸団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

昭和58年2月10日 印刷

昭和58年2月15日 発行

---

発	行	千葉県住宅供給公社
		千葉県千葉市本千葉町13-1
		財団法人 千葉県文化財センター
		千葉県千葉市亥鼻1-3-13
印	刷	有限会社 正文社
		千葉県千葉市都町2-5-5

---